

「大学体育スポーツ学研究（第16号）」優秀論文賞 選考経過および講評

I. 選考経過

1. 選考対象となる論文

2019年3月に発刊された「大学体育スポーツ学研究（第16号）」（旧雑誌名「大学体育学」）に掲載された5論文（全論文種類を含む）が選考対象となった。

2. 選考委員

委員長・西田順一、幹事・難波秀行

第1次選考委員：木内敦詞、小林雄志、笹井浩行、佐藤 和、鈴木久雄、園部 豊、田原亮二、中田征克、中山正剛、西垣景太、西田順一、西原康行、平工志穂（以上、「大学体育スポーツ学研究」編集委員）

第2次選考委員：大友 智、瀧本真己、武田典子、島崎崇史

3. 選考結果

第1次選考では、選考委員それぞれより優秀論文賞に該当する2論文の推薦がなされた。次に、第1次選考にて推薦された論文のうち、推薦数が多かった上位2論文を第2次選考の対象とした。第2次選考では選考委員が2論文に対して量的・質的評定を行い、最終的に以下を受賞論文として決定した。

受賞論文名

大学体育における実技と講義の同時受講が大学生の健康度・生活習慣に与える影響

著者：中原雄一・西脇雅人・藤本敏彦・池田孝博

掲載：大学体育スポーツ学研究 第16号, pp.13-18

II. 講評

著者は、大学設置基準の大綱化以降における大学体育授業の時間数減少を指摘し、とくに、実技科目に比べて講義科目の必修率が低い現状について問題提起を行っている。

体育実技科目の受講により体力向上やメンタルヘルスの改善等を示したことが報告されているが、講義科目の受講に伴う健康行動等への効果は評価しにくいという背景があり、講義科目の開講必要性を示すことが難しいことを主張している。このことは、多くの大学で共通した課題と考えられる。

上記の問題意識より、著者は実技科目と講義科目を同一授業期間にて受講する受講形態が、受講生の健康度・生活習慣の変化に影響を与えるかどうかを検証することを目的として研究を実施した。分析の結果、講義科目と実技科目を同一授業期間にて受講することは、生活習慣の悪化、とりわけ食習慣の悪化を抑制することを明らかにした。すなわち、実技科目と合わせて講義科目を受講させることにより学生の食習慣の悪化を防ぐ可能性があることを示唆した。

受賞論文は、大学体育の履修状況の問題を踏まえ、実技科目と同時に講義科目を受講することの教育効果を明らかにするため、先行研究にて検証された評価尺度を用いて縦断的調査を行っている。大学体育の教育効果を示した研究は多いが、本研究は受講形態の違いにより教育効果に差異が生じるか否かという、新たな視点を持った研究と評価できる。また、統制条件を設定した準実験的研究にて実施しており、教育機関では比較的困難であるが研究デザインを整え、貴重なデータを提示していると評価できる。実技科目と講義科目の同一期間の受講による食習慣の悪化抑制効果を示唆した応用可能性の高い研究である。今後は、教育効果に影響を及ぼすと考えられる受講者の授業への参加状況や学修内容の理解度等の個人差の影響の検討、また受講形態による差異の要因の解明、さらには、授業の具体的な構成内容や対象者の内省などの資料を含めた検証等、より精度の高い研究に期待したい。